

伊勢半本店

Since 1825

June 2011
Vol.18

ミュージアム 通信

降っても晴れても、 傘を差して 江戸を歩こう

震災のお見舞い

蒔絵十種香箱復元制作
プロジェクト報告展について

[かわら版]

講座のご案内



「名所江戸百景 鎧の渡し小網町」・歌川広重 画・国立国会図書館所蔵

震災のお見舞い

3月11日(金)に発生しました東北地方太平洋沖地震により被害を受けられた皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

伊勢半本店 紅ミュージアム

降っても晴れても、傘を差して江戸を歩こう

江戸の梅雨、濡れをぼる町と人

五月雨をあつめて涼し最上川

これは、松尾芭蕉の句として知られる「五月雨をあつめて早し最上川」の発句（連歌・連句の第一句）である。芭蕉がこの発句を詠んだ時期は、元禄二年（二六八九）の旧暦五月二十九日の頃と言われている。すなわち、現在の



「名所江戸百景 赤坂桐畑雨中夕けい」
二代広重 画・国立国会図書館所蔵

六月下旬である。

「五月」という字からついつい勘違いしがちだが、「五月雨」とは本来夏の、梅雨時を意味する語だ。同様に、「五月晴れ」は梅雨晴れを指す。今でこそ新暦五月のよく晴れた日を指して五月晴れと言うが、もともとは梅雨の合間に訪れるつかの間の晴天を意味した。

どんよりとした五月雨の空が垂れ込める江戸の

町々は、連日の雨にすっかり濡れをぼり、往来には傘を差す人々、あるいは蓑笠を着た物売りの姿があった。

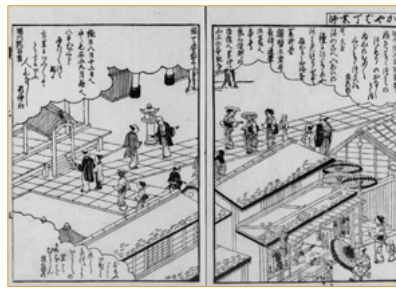
江戸の町で雨具を取り扱

扱う店が集中していたのは、日本橋の小舟町・芳町、小網町の辺りで、この一帯を別名「照降町」と呼んだ。落語「髪結新三」の中に、雨が降ってきたので照降町で下駄と傘を買って履き替えたというシーンがある。傘だけでなく下駄も購入したのは、雪駄（草履）では雨で足元が濡れてしまうからだ。照降町には下駄や雪駄を扱う店も多く、雨が降れば下駄と傘が売れ、晴れば雪駄が売れたという。照っても降っても商いに関係する町だったのだ。まったく照降町とはうまく言ったものである。

当初、傘の製造は京都や大坂で行われ、江戸はもっぱら下り物を扱う店

ばかりだった。しかし、『続江戸砂子』（一七三五年刊）に江戸の名産品として「茅場町傘」が載っているように、地傘（江戸で作られた傘の意）の店がまったく無かつたわけではない。

この地傘屋は、照降町か



『絵本続江戸土産』より茅場町の傘屋・国立国会図書館所蔵

川柳の題材になるほど、こうした光景が珍しくなかったのだろう。

多種多様な笠と傘

そもそも日本における雨具の歴史はどこまで遡るのだろうか。文献上ではすでに『日本書紀』（七二〇年完成）の中に「笠」や「蓑」「雨衣」が確認できる。柄のついた傘についても同様で、奈良・平安時代の諸史料に散見する。笠（被り笠）は、主として竹・菅・藺を資材に編成され、貴賤問わず風雨雪陽光を防ぐものとして、または面を隠すものとして古来用いられてきた。その種類はおびただしく、晴天用・雨天用問わずに例を挙げれば、竹笠・菅笠・藺笠・網代笠・塗笠・綾藺笠・平笠・尖笠・市女笠・菰僧笠・天蓋・鳥追笠・殿中笠・桔梗笠・葛籠笠・八つ折笠・陣笠・路地笠・尾張笠・信楽笠・加賀笠などなど、枚挙にいとまがない。



「東都名所 日本橋之白雨」・歌川広重 画・国立国会図書館所蔵
白雨とは夏場のにわか雨のこと。

これらの名称はその資材や形状・使用者・産地などに由来する。

ところで、江戸時代はとくに中期以降になると、伊勢参りや金比羅参詣十八か所札所巡りなど、人々の旅への欲求というものがひとときわ高まりを見せる。案内記や道中記・名所図会の類、いわゆる旅のガイドブックが盛んに出版され、この背景には東海道をはじめとする交通機関の整備や、宿場・旅籠といった宿泊施設が充実したことも大きく関係しているだろう。庶民の旅は目的もスタイルも様々

で、実に多彩なものだった。そんな旅の必需品のひとつが笠であった。日差し除けに笠を被る人、横殴りの雨の中を笠と蓑を着て足早に駆けていく人、浮世絵の中には旅道中にある江戸の人々の姿がそこかしこに描かれている。一方、柄の付いた傘(差し傘)については、元来、

言葉に表れているように、本来差し傘というものは、庶民が気安くその頭上に差せるような代物ではなかった。日傘や雨傘が庶民の身近な生活用品へ転じていくのは、長柄傘が短柄傘になる元禄の頃を境にした、それ以降のことであった。

実用性以上に、装飾性・演出性に重きを置いた用途が目立ち、使用者は長いこと貴族や武士といった一部の特権階級に限られていた。基本的に傘の柄は長く(長柄傘)、供の者(下位者)が主人の頭上高くに差し掛ける形式だった。

最近はめっきり聞かなくなってきたが、「乳母日傘」という言葉がある。これは良家の子供に乳母が日傘を差し掛けることから、転じて子供が必要以上に過保護に育てられることを意味する言葉だ。この



「江戸名所 深川八幡宮」(部分)・歌川広重 画・国立国会図書館所蔵
少女に日傘を差し掛ける乳母。

傘の基本形は江戸時代に完成

江戸時代に普及した傘は、竹や木で骨組みをし、柄を作り、桐油や荏油で防水加工を施した和紙を張り合わせたものだ。「はじき」の部分が改良され、



(無題)・豊国画・国立国会図書館所蔵
蛇の目傘を開き、下駄を履き、着物の裾が濡れないようにと棲(つま)を持って歩く女性。

より開閉しやすい構造になり、現代の傘に通じる基本形は、ほとんど江戸時代から留まっていたと言って過言ではない。傘・蛇の目傘・奴傘・紅葉傘・細傘など、こちらも種類が豊富で、『守貞漫稿』(一八三七〜五三年)によれば、他人の傘と取り違えないように、「自称ノ一字、或ハ家号ノ一字、又ハ定紋」を傘に描いたそうだ。

また、文政の頃には、役者絵を貼り合わせた女兒用の日傘もあったという。まるで人気キャラクターをプリントした現代の子供用傘のようだ。

それにしても、よくよく考えてみるに、日差しや雨の降る下で、人がそれを防ぐ手段というものに劇的な変化が今日まで訪れていないとわかる。これほど科学技術の発達した世にあっても、我々が頭上に差すのは相変わらず傘なのである。

今昔人の頭上に傘ありき。なんとも感慨深いではないか。

【注】
本論では言及しなかったが、江戸時代のもうひとつの雨具に「合羽」がある。合羽は、木綿製、または防水加工を施した油紙製のものが一般的。携帯用の懐中合羽なども作られた。

講座のご案内

■「大人のおりがみ講座」

しなやかで美しい和紙の魅力に触れながら、おりがみを楽しむ講座です。実用的な小物や季節を彩る作品の制作を予定しています。

講師：小林 一夫氏

(NPO法人国際おりがみ協会会長、おりがみ会館館長)
2011年6月25日(土)14:00～16:00

■定員8名

■参加費1,500円(日本紙おりがみ・テキスト付き)

※定員に達し次第、受付終了とさせていただきます。

■「夏休み子ども自由研究 紅^{べに}ってなあに」

子供向け社会科(生活科)学習講座です。「昔ながらの紅の作り方」・「紅を塗ってみよう」・「紅を食べてみよう」など、紅についてコンパクトにわかりやすく解説します。夏休みの自由研究にお役立てください。

講師：弊社スタッフ

第1回：2011年8月4日(木)14:00～15:30

第2回：2011年8月5日(金)14:00～15:30

■対象学年：小学校3～4年生

■定員10名(両日とも親子2人1組で5組) ■参加費無料

※7/1より受付開始。定員に達し次第、受付終了とさせていただきます。

お問合せ・お申込みは紅ミュージアム(03-5467-3735)まで

Webサイトリニューアルのご案内

伊勢半本店のWebサイトがリニューアルいたしました。新規コンテンツを追加し、紅の情報をより深く知ることができるサイトになりました。また、紅ミュージアムのページも充実を図り、資料紹介や化粧史コラムほか、今後の企画展やイベントの情報も公開していきますので、是非ご覧ください。

<http://isehan.co.jp>

小町紅『手毬』通年販売化のご案内

期間限定商品(春期・秋期)として、大好評をいただいている小町紅『手毬』。なかでも人気の定番柄「赤てまり」と「青てまり」の2柄を、Webサイトのリニューアルに合わせて、4月1日より、一年を通じてお求めいただけるようになりました。普段使いはもちろんのこと、贈り物としてもおすすめです。



今秋開催の蒔絵十種香箱復元制作プロジェクト報告展について

このたびの東日本大震災により、被害を受けられた皆様に、心よりお見舞い申し上げます。この震災を受け、被災地の一日でも早い復興を心から願うとともに、私どもに何ができるかを考えてまいりました。そこで、微力ながらこの秋開催予定の、宇和島伊達家伝来・蒔絵十種香箱復元制作プロジェクト報告展の観覧料全額を、義援金として寄付することにいたしました。

本プロジェクトには、石川県輪島市在住の方が多く関わっております。輪島市は、この3月に完全復興宣言いたしました。4年前の能登半島地震の折、大きな被害を受けた地です。その震災を経験された方々が本プロジェクトに参加し、素晴らしい作品を制作されました。また、今回復元した十種香箱は宇和島伊達家伝来の品。宇和島伊達家は、このたび深刻な被害を受けた仙台ゆかりの伊達政宗の第一子である伊達秀宗を祖とします。このような巡り合わせの中で展示会を開催することに、ひとかたならぬ意味を感じております。

報告展の詳細につきましては、次号で改めてご案内いたします。素晴らしい作品の観覧を楽しみにお待ちしております。



黒塗御紋散梅に竹文蒔絵香道具箱(一部)・公益財団法人 宇和島伊達文化保存会蔵

Since 1825
伊勢半本店  ミュージアム

●開館時間／11:00～19:00 ●休館日／毎週月曜日(月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります) ●入場無料
東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL&FAX:03-5467-3735
東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehan.co.jp>